

平成27年1月10日(土)

老球の細道101号

## 2人の偉大なる男の言葉

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

年末のウインターカップを見て全国のトップクラスに立つチームはほとんど全国、外国から選手をリクルートする学校だった。これに対してわが会津地区の高校チームはすべて地産地消。このような地区からどうやって全国で戦えるチームを輩出できるのだろう。絶望感に苛まれる時、紅白歌合戦にノーベル賞を受賞した山中教授が出演しているのを見た。

iPS細胞を医療技術や薬の開発実用化させる研究は、今や国際競争にさらされている。特にアメリカとの競争は大変らしい。研究に関する資金力が日本とは比べものにならないくらい凄い。まともにいったら負けるのはわかっている山中教授は、ガリバーとの戦いがある雑誌で次のように述べていた。

【まともに競争したら負けるのはわかっている。工夫するしかない。つまり、相手が気づかないような、でも非常に大切なこと、そしてまた、大切だけれど向こうが面倒くさがつてやらないことを我々はやっていく必要がある。海外の多くの研究者達も研究していたんだけど、僕らが本当に手作業で遺伝子の機能を1個1個調べていったのに対して、彼等はすごいお金をかけて何万もの遺伝子の機能をいっぺんに調べる。明らかに向こうが有利だった。ただ、彼等はいわばブルドーザーなんです。一気にガーッと作業できるんですが、どうしてもブルドーザーのシャベルから漏れる部分が出てくる。それに対して僕らは手作業ですから漏れない。彼等が漏らした部分に、iPS細胞を作るヒントがあったわけです】

タレント揃いのガリバーチームに、地産地消の田舎チームがまともに立ち向かっても勝ち目はない。ガリバーが気づかないこと、面倒くさがつていること、例えば「コミュニケーション」、「きめ細かなファンダメンタル」、「チームプレー」等を毎日手作業で地道に繰り返すことに活路(勝つ路)を見いだせるかもしれない。

高倉健が亡くなって2か月が過ぎた。『プロフェッショナル仕事の流儀・運命を変えた33の言葉』(NHK出版新書)に健さんの「生き方が仕事に出る」掲載されている。

【俳優にとって大切なのは、造形と人生経験と本人の生き方。生き方が出るんでしょね。テクニックではないですよ。肉体は訓練すると、ある程度までいきますよ。僕でも調教されると筋肉がつくしね。毎日良いトレーナーについて柔軟体操をやっていれば、体もしっかり柔らかくなる。本を読んで勉強すれば、ある程度の知恵もつくよね。生き方っていうのは、そうはいかない。芝居に一番出るのが、その人のふだんの生き方じゃないか】

そして、その生き方で最も大切にしているのは感受性だと言う。健さんはさらに語る。「自分の感性、感じられる心を大切に。それしかない。そのために良い映画を見たり、自分が感じられる映画や、感じられる監督とか俳優さんを見つけて、その人たちのものを追っかける。それから自国のものばかり見ないで、外国のものを意識的に見る。それから、自分が感動できる小説を読む。あとは色々な美術品を見る」

日本を代表する映画監督・山田洋次は、「彼は何を演じても高倉健。ある典型的な人間像を作り、自分自身の人生も重ねた」と健さんを絶賛する。アメリカのバスケットボールの名コーチ達も、必ず自分のカラーや哲学をそのチームに植えつける。チームを見るとヘッドコーチは誰だということがすぐにわかる。コーチも生き方がそのチームに出る。